名品コレクション展Ⅲ

特集　開館 35 周年事業　猛獣画廊壁画修復プロジェクト　修復完了報告展

2023 年 12 月 19 日（火）～ 2024 年 3 月 10 日（日）

名古屋市美術館のコレクション

エコール・ド・パリ

第一次世界大戦後、芸術の都パリには世界各地から夢を抱いた若い美術家たちが集まってきました。

モディリアーニ、シャガール、スーチン、パスキン、キスリング、藤田嗣治、ヴァン・ドンゲン、ザツキン、ブランクーシなど、故郷を離れた異邦人たちは、貧しいながらも自由で活気に溢れた生活のなかで、パリ生まれのユトリロ、ローランサンといった画家仲間との交友や新しい芸術が次々に登場するパリ画壇に刺激されながら、それぞれ独自の芸術を開花させました。

芸術の都パリに育まれた画家たちは、総称して「エコール・ド・パリ」と呼ばれています。身近な人々の姿や街角の風景を描いた彼らの作品には、キュビスムやシュルレアリスムといった同時代の前衛的な芸術とは違って、庶民生活への親密感が溢れるとともに、異邦人としての郷愁が漂っています。

「エコール・ド・パリ」の系譜につながる日本人画家としては、パリに生きパリを描き続けた荻須高徳をはじめとして、田中保、海老原喜之助、岡鹿之助などが活躍しました。

メキシコ・ルネサンス

20 世紀初頭のメキシコ革命を背景として、マヤ、アステカといったインディオ文明の復興と新しいメキシコの建国精神を民衆に伝えるために創始されたメキシコ壁画運動は、アメリカ大陸において初めて登場した美術運動として「メキシコ・ルネサンス」とも呼ばれ、世界的に高く評価されています。

壁画運動の三大巨匠であるオロスコ、リベラ、シケイロスはイタリア・ルネサンスの壁画をはじめとして、ヨーロッパの近代美術（表現主義、キュビズム、未来派など）に学びながら、メキシコ民族独自の造型を踏まえた現代の壁画を三者三様に創造しました。

彼らは 1930 年代のアメリカ合衆国においても数多くの壁画制作を行って、「アメリカン・シーン」の画家たち（シャーン、スローンなど）をはじめとして、アメリカの現代美術の誕生に大きな影響を与えています。

三大巨匠の他にも、壁画運動以降の世代を代表する画家タマヨ、民衆版画家ポサダ、魅力的な女性画家カーロやイスキエルド、写真家ブラボーやモドッティなど、数多くの個性豊かな美術家たちが活躍しました。

北川民次もまた同時代のメキシコに滞在して、野外美術学校の運動に携わりながら、壁画運動から学んだ精神と画風によって、帰国後は日本画壇において「反骨の画家」として活動しました。

現代の美術

第二次世界大戦以降、急速に展開した現代美術は、既成の美術の枠組みを越えて、まったく新しい表現や造形、空間や概念を開拓してきました。パリからニューヨークへ中心地が移行して、国際化した美術界において、数多くの日本人作家が海外に進出して、創作的な活動を活発に展開しています。

名古屋文化圏もまた、荒川修作、桑山忠明、河原温といった国際的に評価の高い作家たちを輩出しました。彼らは、ある特定の概念を言葉や記号などによって提示する「コンセプチュアル・アート」や表現を極限まで切り詰めた「ミニマル・アート」などの現代美術の分野の代表作家として知られています。

1980 年代以降になると、現代美術は新しい局面を迎え、その表現と内容がより豊かに多様化して、それぞれの作家の思想（芸術観）が作品のなかに明確に現れてきました。

新しい世紀の激動に翻弄されながら現在も、作家たちは私たちが生きている時代と世界を、過去から未来へと連続する時間の流れのなかで、あるいは生命と宇宙の連関のなかで、それぞれ独自の観点から鋭く探求し、深く思索することによって、新しい美術を創造しようとしているのです。

郷土の美術

名古屋の近代美術は、明治後期頃から本格的に始まりました。東京に学んだ野崎華年と鈴木不知が洋画塾を開設して、後進の指導を始めるとともに、東京美術学校に学んだ加藤静児や太田三郎が文展に入選するようになって、1910 年には、名古屋の洋画家・日本画家を結集した東海美術協会が創設されました。

大正期には、名古屋独自の洋画グループとして、岸田劉生の草土社に触発されて 1917 年に結成された愛美社（大澤鉦一郎、宮脇晴など）や関東大震災を契機に 1923 年に結成されたサンサシオン（松下春雄、鬼頭鍋三郎など）などが登場しました。

昭和期には、二科会の初期の会員となった熊谷守一や横井礼以、春陽会に参加した山本鼎、帝展の代表作家となった佐分真、独立美術協会に参加した伊藤廉や三岸好太郎、三岸節子などが東京画壇で活躍しました。1930 年代の前衛美術の分野では、シュルレアリスム絵画・写真（北脇昇、下郷羊雄、山本悍右など）や抽象絵画（村井正誠、矢橋六郎、山田光春など）が活発な活動を展開しました。

日本画では文展の川合玉堂、院展の前田青邨をはじめ、地元では平岩三陽、渡辺幾春などが活躍しました。

エコール・ド・パリ
海老原喜之助とパリ

100 年前の 1923 年 7 月、当時 18 歳の海老原喜之助（1904-1970）はパリに到着しました。美術学校に進学するよりも、本場で学んだ方がよいという、有島生馬（洋画家、兄は有島武郎、弟は里見弴）らの助言に従い、祖母から旅費・滞在費の援助を受けてフランスへ渡ったのです。到着するとすぐにモンパルナスに住む藤田嗣治を頼り、アトリエを自由に出入りして見学することを許されました。また、藤田と行動を共にすることで、キスリングやジュール・パスキン、マン・レイといった美術家たちとも知り合いました。海老原はキスリングのアトリエをよく訪問するようになり、そこでも作画の一部始終を観察していました。

1918 年 11 月に第一次世界大戦が終わると、為替相場が渡航者に有利になったこともあり、渡仏してパリに滞在する日本人が増えていきました。海老原が海を渡った 1923 年当時、すでにパリにいた日本人美術家には藤田のほか、長谷川潔（1919 年渡仏）、田中保（1920 年渡仏）らがおり、そのあと佐伯祐三（1924 年渡仏）、岡鹿之助（1925 年渡仏）、荻須高徳（1927 年渡仏）、伊藤廉（1927 年渡仏）らが到着しました。また、南仏のセレに 3 年間滞在していたハイム・スーチン（現ベラルーシ生）は 1922 年に、大戦時にパリを離れていたマルク・シャガール（現ベラルーシ生）は 1923 年にパリに戻っています。平和と好景気を享受した 1920 年代のパリは、異邦人と観光客であふれていました。

海老原は 1924 年、パリ到着から 1 年あまりでサロン・ドートンヌに初入選を果たします。1927 年には、批評家コルベールが注目の新人を紹介する、第 10 回サロン・ド・レスカリエに招待されました。同じ展覧会には、後に美術史に名を残すことになる、スイスの彫刻家アルベルト・ジャコメッティとイタリアの画家マッシモ・カンピーリが選ばれています。これが契機となって、ジョルジュ・ブラックやコンスタンティン・ブランクーシなどを取り扱った画商アンリ・ピエール・ロシェと契約。ロシェの力によって、ニューヨークで個展を 2 度開催するなど、成功を収めました。《風景》（1927 年）、《冬》（1928 年）はこの頃の作品です。その後、《群鳥》（1931 年）のような青と白を基調色として、俯瞰した雪景色などを描くスタイルを確立します。

しかし、1929 年 10 月、ニューヨーク株式市場の暴落が世界恐慌を引き起こします。以前のように絵は売れなくなり、店をたたむ画商が続出、美術家たちは一気に困窮しました。海老原も例外ではなく、ロシェとの契約が切れたことで貧困に苦しみ、1927 年に結婚したベルギー人の妻の実家を頼るものの、生活は楽になりませんでした。ついには妻と離婚し、1933 年、2 人の息子を連れて失意のうちに日本へ帰国します。1930 年代は円の価値が下落したことで、海老原だけでなく、多くの日本人がパリを離れました。

戦時中、戦争画の拒否を在京の画家たちに呼びかけた海老原は、これが原因で藤田の怒りを買いましたが、晩年、1966 年に幸子夫人（1940 年に再婚）とともに外遊した際には、パリで藤田と再会し旧交をあたためています。同年 10 月には、藤田が構想し堂内の壁画を手がけた、ランスの平和の聖母礼拝堂（シャペル・フジタ）が完成し、海老原夫妻はその献堂式に参列したのちに帰国しました。その 1 年後に再度渡欧し、1968 年 1 月にはチューリッヒで闘病していた藤田の最期を看取っています。海老原自身も滞欧中に体調を崩し、1970 年 9 月、肺がんのためパリで客死しました。

現代の美術
Woman〈私〉の物語

古今東西、女性は美の象徴として、繰り返し描かれてきました。近代になって、「日常（性）」が絵画のテーマとして登場し、またそれまでとは異なるリアリズムの概念が成立すると、描かれる女性像もその意味を変化し、物語や神話の登場人物としてだけではなく、生身の、男性から見た性愛の対象としての「女性」が意識・強調され、表現されました。

ただ一方で、表現者としての女性の存在が認識されるようになったのは、20 世紀に入ってからのことです。1960 年代には「女性の解放」を目指した“ウーマン・リヴ”運動が起こりますが、それでも当時のコンセプチュアル・アートやミニマル・アートによって概念が先行し、記号や物質感、平面性が強調された、言わば“男（性）社会”が生み出した表現形態とその後の「インスタレーション」全盛の時代では、女性作家の活動もそれに追随するものと見做されがちでした。

そうした状況が大きく変化したのは、1980 年代後半になってからのことです。ニュー・ペインティングによって、“絵画の復権”が果たされ、また、“ポスト・モダン”が叫ばれた現代思想によって、従来の「大きな物語（歴史）」よりも個人の日常や内省的な心情等、言わば「小さな日記」が重視されると、私的な寓意を描いた彼女達の作品には多くの共感や評価が寄せられました。

1950 年代後半、ニューヨークという「現代アート」の最前線で闘ってきた草間彌生（1929 年生まれ）は、今日その才能を多方面で発揮しています。

大阪の〈具体美術協会〉に所属していた田中敦子（1932-2005）は、1955（昭和 30）年、展示室の壁沿いにベルを設置し、それらが連動していく音のインスタレーションを発表しました。その「回路」図は、やがてドローイングの連作として描かれ、タブローへと展開しました。円と線が錯綜し、結び着くさまは、個々人のつながりや交信を連想させます。

また、医学用眼球モデルをフレームに入れ、縦横無尽に走る糸で空間ごと包み込んだ塩田千春（1972 年生まれ）の作品は、密集や錯綜を超え、観る者に混沌すら感じさせます。彼女たちが用いる糸や布といった素材は伝統的な女性の手仕事と身体性すら想起させます。

オートマティスム（自動筆記）によるドローイングを描いた眞島直子（1944 年生まれ）や、近年再評価の機運が高まりつつある地元・名古屋出身の美術家・岸本清子（1939-1988）のパノラマに見られる壮大や強靭とは対極にある、儚さや脆弱さ、あるいは日常性といった要素も近年現れた女性美術家の独自性と言えましょう。

今回の展示では、ご寄託いただいている作品によって、当館の所蔵作品だけでは到底紹介しきれない現代女性美術家の多様で優れた表現と動向を紹介いたします。最後になりましたが、貴重な作品をご寄託いただいておりますご所蔵家の皆様に厚く御礼申し上げます。

メキシコ・ルネサンス
メキシコ・ルネサンス：シケイロス没後 50 年

2024 年はダビッド・アルファロ・シケイロス（1896-1974）の没後 50 年にあたります。シケイロスはメキシコ・ルネサンスを代表する画家の 1 人で、ディエゴ・リベラ（1886-1957）、ホセ・クレメンテ・オロスコ（1883-1949）らと 1920 年代以降のメキシコ壁画運動を主導しました。政治活動にも積極的に取り組み、生涯を通して投獄、監禁、国外追放を幾度も経験し、その作品もほとんどが政治的、民族的文脈を強く持つものとなっています。今回の特集では、名古屋市美術館所蔵のシケイロス作品に加え、彼に関する資料を展示し、その画業や活動を 2 期に分けてご紹介します。

前期（2023 年 12 月 19 日［火］～2024 年 1 月 28 日［日］）は、シケイロスの投獄・監禁期を中心に取り上げます。シケイロスは生涯 3 度、長期の投獄・監禁生活を経験しますが、これらの時期に多くの作品を制作しました。《うずくまる裸婦》、《横たわる裸婦》は 1930 年代の投獄期に制作されたもので、この時期にシケイロスは 100 点以上のタブロー画を制作しました。1940 年にトロツキー暗殺の嫌疑をかけられチリに亡命したシケイロスは、チリで逮捕されチリャンで軟禁されましたが、この際にチリャンのメキシコ学院図書館に壁画《侵略者に死を》を描きました。《独立 1818 年》はその下絵です。

1944 年にメキシコに帰国したシケイロスは、1947 年にはメキシコ国立芸術院で個展を開催するなど次第に名誉を回復していき、1951 年の第 25 回のヴェネツィア・ビエンナーレにはメキシコ代表として招待されました。同時にその政治的影響力も強まっていき、1960 年には暴動扇動の容疑で投獄されました。しかし、その経緯に多くの芸術家や知識人が疑問を抱き、釈放要求運動が行われました。その中にはチリの国民的詩人パブロ・ネルーダ（1904-1973）もいました。《奴隷》、《母と子》はこの時期の制作であり、《奴隷》の裏面には虐げられた民衆についてのシケイロスの直筆文が書かれています。

後期（2024 年 1 月 30 日［火］～3 月 10 日［日］）は晩年のシケイロスの画業・活動を象徴する「シケイロス文化ポリフォルム（以下ポリフォルム）」の関連資料を展示します。ポリフォルムは劇場やギャラリーを備えた総合文化施設で、「メヒコ 2000」という再開発計画の一環として建設されました。しかし、結局この計画は頓挫し、ポリフォルムに隣接して建設された巨大ホテル「オテル・デ・メヒコ」は現在では世界貿易センターへと改装されています。1964 年に釈放されたシケイロスは、1966 年にポリフォルムの壁画制作を始めました。その作業は主にシケイロスの工房「ラ・タレッラ」で行われました。壁画に彩色彫刻を埋め込むことで、建築・絵画・彫刻の統合を果たしたポリフォルムは、まさにシケイロスの画業・活動の総決算です。

1972 年には日本で「シケイロス展」が開催され、シケイロスは初の来日を果たしました。その 2 年後の 1974 年 1 月 6 日に逝去、当時のメキシコ大統領の指示により国葬が営まれました。

郷土の美術
抵抗と模索―〈全日本学生写真連盟〉写真運動の展開

1965（昭和 40）年、全国の大学の写真サークルの横断的組織である〈全日本学生写真連盟（全日、1952 年創設）は、その活動の規範であった「共同制作」による表現のマンネリ化や、ヒエラルキーによる閉塞感を打破すべく、改革を目指しました。

改革推進の中心となった〈明治大学カメラクラブ〉は、写真評論家の福島辰夫（1928-2017）を指導者として招き、やがて全国に亘る「キャンペーンの運動化」を提起します。

福島は、キャンペーンの方針として「個の徹底化と組織化」を掲げ、「個が現実に直面したところでなりたった写真」を学生たちに求めました。高度経済成長期に入って十年、この時期、土門拳と木村伊兵衛によって推進された戦後の「リアリズム」表現は、すでにその“効力”を失い、新たな写真表現が求められていました。

1965 年 10 月、キャンペーン「状況 1965」のための合宿が信州・八ヶ岳で開催され、全国から自由参加で集まった三十数名の学生と二千五百余点の写真が寄せられました。四泊五日で写真の選定が行われ、翌 1966（昭和 41）年 2 月、この制作活動の最終的表現として自費出版による写真集『状況 1965』が完成、刊行されました。A6 判文庫本サイズの判型 189 頁に掲載された写真作品 94 点は、それまでの“分業的な”共同制作とは異なり、互いに脈絡を持たない、正しく個人的感覚による表現が集積したものでした。

同様の手法と手順により、引き続き、キャンペーン写真集 『状況 1966』が 1968（昭和 43）年 8 月に出版されましたが、同月には「集団で検討をかさねながら継続的に撮影を続ける全国的規模の共同制作」として、〈広島デー〉が提起されています。

だが、この時期になると、「現実」に直面する学生たちの認識は、「表現」よりも「運動」へとシフトして行き、やがて「日本全土に向う撮影行動の展開」が提唱されました。「（撮影者）お互いがひとりの写真家としてあるテーマを共通して持ち、それに対して自由に写真を撮影し、その結果としての写真を一つの大きい表現としてまとめ上げて行く」、その手法は、“集団撮影行動（集撮）”と呼ばれ、やがてその活動は政治や環境問題へと向けられて行きます。

今回の展示では、〈全日本学生写真連盟〉のキャンペーン活動の最終成果である写真集を通して、それぞれのプロジェクトの提起の経緯や、撮影から出版に至る運動の過程を、原稿写真作品や資料によって辿ります。下記の三期に分けて展示・紹介いたします。

Ⅰ.「キャンペーン・状況 1965」－“自己認識に向けて”の始動
2023（令和 5）年 12 月 19 日（火）～2024（令和 6）年 1 月 14 日（日）
Ⅱ.「ゲバ棒か、カメラか」－“斗争写真”の位相
2024（令和 6）年 1 月 16 日（火）～2 月 12 日（月・祝）
Ⅲ.「集団撮影行動」－“告発する”写真
2024（令和 6）年 2 月 14 日（水）～3 月 10 日（日）

尚、今回展示、ご紹介する〈全日本学生写真連盟〉の活動とその成果を示す貴重な資料については、〈愛知大学写真研究会〉OB で、〈中部学生写真連盟〉の代表委員長を務められた松本吉生氏からご寄贈いただきました。また、関連する資料の閲覧や聞き取り調査、さらには資料の借用に関しては〈全日本学生写真連盟〉OB、OG 有志の皆さまからご教示、ご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

特集
開館 35 周年事業
猛獣画廊壁画修復プロジェクト　修復完了報告展

当館の開館 35 周年事業「猛獣画廊壁画修復プロジェクト」では、第 2 次世界大戦時に動物を失った東山動物園にて、1948 年に旧カバ舎に設けられた「猛獣画廊」に展示された 3 枚の動物の壁画の修復を行ってきました。このたび修復が完了し、皆様にご覧いただくことになりました。

名古屋市の貴重な文化財である壁画 3 枚を修復する本プロジェクトは、皆様からご支援いただいた「東山動物園猛獣画廊壁画修復募金」により実現いたしました。あらためて心より御礼申し上げます。

修復は愛知県立芸術大学文化財保存修復研究所に依頼し、修復の専門家に加え、文化財の修復や保護について学ぶ学生や研究者も参加したチームで行われ、人材育成を図ることも目的としました。

作業は 2022 年 7 月に事前調査から始まり、2023 年 12 月初めに 3 枚の壁画の修復を終えました。専門技術を必要とする修復作業を当館内で行うことは稀ですが、このたびはご支援いただいた感謝として修復の進捗をお伝えし、また修復そして文化財保護への理解を深めていただく機会とすることを目指し、修復を公開で行ってきました。その間には、解説会やワークショップ「絵のお医者さんの仕事」を開催しました。小中学生を迎えて実施した「絵のお医者さんの仕事」は、作業の進捗にあわせ、作品調査や補彩作業を体験する内容で、大変にご好評いただきました。

本プロジェクトは多くの方のご理解、ご協力のもと実施してまいりました。深く感謝申し上げます。引き続き、美術館の重要な役割である、美術品を守り、後世へ引き継いでいく修復・保存活動へのご支援、ご理解をお願いいたします。

関連講座・報告会・ワークショップ

「名品コレクション展Ⅲ」「特集　開館 35 周年事業　猛獣画廊壁画修復プロジェクト　修復完了報告展」の期間中に下記のイベントを開催します。ぜひご参加ください。

コレクション解析学 2023-2024

当館のコレクションから 1 点を選び、その魅力を学芸員が紹介する美術講座です。

日時：2024 年 2 月 24 日（土）14:00-（約 90 分）
会場：当館 2 階講堂（定員 180 名、先着順、入場無料）
演題：「集団撮影行動とは何か-学生写真運動資料解題」
講師：竹葉丈（当館学芸員）

1960 年代後半、「政治の季節」に展開した学生写真運動の表現とその内容について紹介・検証します。

開館 35 周年事業　猛獣画廊壁画修復プロジェクト
修復完了報告会
未来へつなぐ　猛獣画廊壁画

2022 年よりスタートした猛獣画廊壁画の修復が完了しました。壁画修復チームメンバーが、どのように壁画を直したのかをお話します。

日時：2024 年 1 月 13 日（土）14:00-15:30（開場 13:30）
会場：当館 2 階講堂（定員 180 名、先着順、入場無料）
講師：成田朱美（壁画修復チームリーダー・愛知県立芸術大学文化財保存修復研究所研究員）ほか

当日 13:00 から、名古屋市立菊里高等学校音楽科生徒によるミニコンサートを、当館地下ロビーにて開催（参加費無料）します。

美術を楽しむプログラム 2023
折って丸めてくっつけて　カラフル画用紙で 3D 工作！

カラフルな画用紙を使って工作するよ。たいらな紙から 3D(立体)をつくるには、どうしたらいいかな？美術館の作品をヒントに、挑戦してみよう。

日時：2024 年 2 月 18 日（日）、3 月 3 日（日）
【午前】10:00-11:30【午後】14:00-15:30
対象：小中学生（保護者の同伴はご遠慮ください）
定員：各回 25 名（先着順）
参加費：無料
申込方法：右の QR コードから名古屋市電子サービスにアクセスし「名古屋市美術館」で検索、ご応募ください。
申込開始日：2024 年 1 月 4 日（木）

名古屋市美術館　Nagoya City Art Museum
名古屋市中区栄二丁目 17 番 25 号（芸術と科学の杜 白川公園内）
TEL 052-212-0001　FAX 052-212-0005
http://art-museum.city.nagoya.jp/